

泉鏡花

海の使者

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注…本篇は明治四二（一九〇九）年七月発行の『文章世界』初出で、後の明治四十五年四月春陽堂刊の作品集「國貞彙がく」に、又、同じ書店より大正九（一九二〇）年十月の刊行された作品集「銀燭集」に収録された。は同年の翌月十二月発行の同じ『新小説』初出である。鏡花数え三十四歳の時の作品である。鏡花好きの間では、泉鏡花の最高傑作と推す者も多い。私自身、鏡花の小説では、第一に挙げるものである。

底本は岩波旧全集（巻十・一九四〇年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（[私の鏡花の俳句集のこちらのものは](#)、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を、概ね、使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。作品集「銀燭集」は[国立国会図書館デジタルコレクションで原本のここ](#)から視認出来るので、不審箇所の確認に使用した。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化したが、その他の表示表記はルビに至るまでそのまま再現してある。

なお、本篇の舞台は、先に公開した「[春晝](#)」「[春晝後刻](#)」（カップリングPDF版・オリジナル詳注附。両篇は明治三九（一九〇六）年発表）と同じく、逗子をロケーションとしている（逗子の名はないが、実在する地名としての「櫻山」や後で注する「玄武寺げんむじ」という寺及び「石を伐出した岩いしきりだ」などから推して、間違いない）。鏡花は、明治三八（一九〇五）年七月、胃腸病の悪化のため、逗子に静養したが、一夏につもりが、結局、滞在四年に及んだ。転居した（但し、本篇の発表はその長静養を終えて明治四二（一九〇九）年二月に、逗子から東京に戻った（麴町の土手三番町）の後であった。謂わば、鏡花の逗子を離れるに当たってのオマージュとして読める）。こちらでは注は最小限に留めるが（各章末にポイント落ちで附した。ベタで附したので、探しやすくするため、注記語句の冒頭を太字にした）、リンク先の冒頭注をまず参照されれば、作品ロケーションも概ね理解出来るものと存ずる。

なお、本篇は私のような海岸生物フリークには堪こたえられない幻想の逸品である。』

海の使者

上

何心なく、背戸の小橋を、向うの蘆へ渡りかけて、思はず足を留めた。

不圖、鳥の鳴音がする。……如何にも優しい、しをらしい聲で、きりきり、きりりり。其の聲が、直ぐ耳近に聞えたが、つい目の前の樹の枝や、茄子畑の垣根にした藤豆の葉蔭ではなく、歩行く足許の低い處。

其處で立佇つて、一寸氣を注けたが、最う留んで寂りする。——秋の彼岸過ぎ三時下りの、西日が薄曇つた時であつた。此の秋の空ながら、まだ降りさうではない。櫻山の背後に、薄黒い雲は流れたが、玄武寺の峰は淺黄色に晴渡つて、石を伐出した岩の膚が、中空に蒼白、底に光を帯びて、月を宿して居さうに見えた。

其の麓まで見通しの、小橋の彼方は、一面の蘆で、出揃つて早や亂れかゝつた穂が、霧のやうに群立つて、藁屋を包み森を蔽うて、何物にも目を遮らせず、山々の茅薄と一連に靡びいて、風は無いが、さやさやと何處かで秋の暮を囁き合ふ。

其の蘆の根を、折れた葉が網に組合せた、裏つたひの畦路へ入らうと思つて、やがて踏出す、と又きりりりと鳴いた。

「何だらう。」

蟲ではない、確に鳥らしく聞えるが、矢張下の方で、何やら橋杭にでも居るらしかつた。

「千鳥か知らん。」

いや、磯でもなし、岩はなし、其れの留まりさうな潯標もない。有つたにしても、恁う人近く、羽を驚かさぬ理由はない。

汀の蘆に潜むか、と透かしながら、今度は心して最う一步。續いて、がたがたと些と荒く出でると、拍手に掛つて、きりきりきり、きりりりり、と鳴頻る。

熟と聞きながら、うかうかと早や渡果てた。

橋は、丸木を削つて、三四本並べたものに過ぎぬ。合せ目も中透いて、板も朽ちたり、

人通りにはほろほろと崩れて落ちる。形ばかりの竹を縄捌げにした欄干もついた、其も膝までは高くないのが、往還り何時もぐらぐらと動く。橋杭も最う痩せて――潮入の小川の、なだらかにのんびりと薄墨色して、瀬は愚か、流れるほどは揺れもしないのに、水に映る影は弱つて、倒に宿る蘆の葉とともに蹠踉する。

が、如何に朽たればと云つて、立樹の洞でないものを、橋杭に鳥は棲むまい。馬の尾に巢くふ鼠はありと聞けど。

「何うも橋らしい。」

最う一度、試みに踏み直して、橋の袂へ乗返すと、跫音とともに、忽ち鳴出す。

（きりきりきり、きりりりりり……）

餘り爪尖に響いたので、はつと思つて浮足で飛退つた。爾時は、雛の鶯を蹂躪つたやうにも思つた、傷々しいばかり可憐な聲かな。

確に今乗つた下らしいから、又葉を分けて……丁ど二三日、激しく雨水の落した後の、汀が崩れて、草の根のまだ白い泥土の缺口から、楔の弛んだ、洪水の引いた天井裏見るやうな、横木と橋板との暗い中を見たが何も居らぬ。……顔を倒にして、捻向いて覗いたが、ト眞赤な蟹が、ざわざわと動いたばかり。やどかりはうようよ數珠形に、其處等暗い處に蠢いたが、聲の有りさうなものは形もなかつた。

手を拂つて、

「はゝあ、岡沙魚が鳴くんた。」

と獨で笑つた。

「やぶちゃん注：『[櫻山](#)』まず、本篇全体のシークエンスの場所となっている『[橋](#)』であるが、『[春晝](#)』『[春晝後刻](#)』でも考証した通り、重要なロケーション・モデルとなった、鏡花が逗子滞在中にごく近くに住み、また、よく散歩した田越川の逗子海岸近くの橋で、恐らくは現在の[富士見橋](#)（ゲーグル・マップ・データ航空写真。起伏を一目で判るようこれを使用する。以下同じ）がそれである。但し、当時の富士見橋（当時は田越橋。上流に現在の田越橋が出来て名を譲つて改名された）は上記のリンク先の注でも考証した通りで、実際、『[今昔マップ](#)』のこちらで見ても判る通り、ちゃんとした橋記号で、ここに語られるほど、ヤワで危なげな橋ではなかったから（[逗子市](#)公式サイトの『[逗子フオート](#)』の『[富士見橋（大正末期）](#)』を見られたい）、そこはまず、鏡花のアレンジがなされていると考えるべきである（但し、別に、この富士見橋よりも河口に近い箇所に人用に仮設したここにいうような簡易の丸木材三／＼四本の簡易橋

がなかったとは断定は出来ないが)。さて、「**櫻山**」であるが、ここでは、その「背後」から雲が流れたと描写するところから、読者は当然、「**櫻山**」は「山」と考える。現行の行政地名「**桜山**」は、逗子市街の南東を東北方向に延びる低い丘陵部の他に、飛地として丁目が振られていない桜山大山があり、この場合、雲が流れるという描写は、この「**桜山大山**」（最高標高百八十九メートル）かと、一瞬、考えたくなるのだが、実際には富士見橋周辺からは桜山大山は手前の南東の丘陵部が遮っていて近いがゆえに見えない。されば、ここは、主人公に立ち位置から、逗子海岸南端に突き出ている葉山マリーナの付け根の現在の「**桜山七丁目**」のピークを指していると、考えねばならない。「**今昔マップ**」

の**一九二七年以降の地図**では、まさにここに地名の「**桜山**」の地名が記されてある（但し、これには別な方向である可能性もなくはない。後述する）。「**玄武寺**」^{げんむじ} 逗子にはこの名の寺はない。しかし、鏡花の書簡体随筆「逗子より」（明治三九（一九〇六）年八月）の最初方に、『われら此の森の伏屋、小川の蘆、海は申すまでも候はず、岩端、松蔭、あさがほ、^{あさがほ ゆふがほ ほたる ろくだいごぜん} 朝顔、夕顔、螢、六代御前の塚は凄く涼しく、^{すこ すい} 玄武寺の龍膽は幽に涼しく、^{げんむじ りんだう いう すい} 南瓜の露はをかしげに涼しく、^{さかなや はんだい すいき} 魚屋の盤臺の鱸は……^{じつ あま やす} 實は餘りお安値からず涼しく、^{すい} ものにつけ涼しからぬはこれなく候。^{さぶらふ} わけて此の頃や、^{やまやま なか しらゆり おもかげ} 山々のみどりの中に、白百合の 俯こそなつかしく涼しく候へ。』とあることから、これは神奈川県逗子市沼間にある**神武寺**（「じんむじ」と読む）を指しているものと断定出来る。これが鏡花の誤記かどうかは判然としない。この「逗子より」は随筆風であるが、一種の書簡体短編とも見做されるからで、或いは、本「海の使者」で使用した神武寺をモデルとした「玄武寺」を確信犯で先行してこちらでも使用している可能性を否定出来ないからである。さて、上記リンクで見えて戴くと判る通り、この神武寺は市街の方の桜山地区の東北に位置する。さて、ここで、本篇「海

の使者」の主人公が「**櫻山**」の背後に薄暗い雲は流れたが、玄武寺の峰は浅黄色に晴渡つて」とあることから、或いは「**櫻山**」はその市街区のなだらかな「**櫻山**」地区を指しているという読みが可能となり、その丘陵部越しに富士見橋付近から神武寺方向（当時でも神武寺のある山は手前の丘陵の裾野が邪魔して辛うじて見えたか見えないかという状況だったのではないかと思う）を見たシックエンスと採る可能性が出てくることになるのである。しかし、そうすると、主人公は逗子海岸の海側を描出せずに、反対の、位置状況からはまず実際には見えない神武寺の方向の遠山を眺めていることになるのだが、私には、どうもその解釈には肯んじ得ないのである。本篇のテーマは「海の使者」である。さすれば、田越川の流れを河口に向って右手の鶴鳴ヶ崎（**春晝後刻**）の印象的なエンディングのロケ地）方向をまず眺めて、反時計回りに視線を移して、神武寺方向へとカメラをパンしたのだと採って初めて、このシーンの描写の優れた広角のパノラマは完成すると読むからである。と言うより、そもそものが、「**櫻山**」の背後に」は「薄暗い雲は流れた」けれども、それに反して、「玄武寺の峰は浅黄色に晴渡つて」いたと言っていることに気づけば、これは同じ方向を見てはいないことが判然とする。薄黒い雲が神武寺の手前の桜山の丘陵の背後に流れてしまったら、そもそものが、その真後ろの直近

にある神武寺の峰は、その雲に遮られてしまうからである。「石を伐出した岩の膚」というのは、神武寺の後背直近にある「池子石の石切場跡」のことである。ここも、恐らくは現在は逗子市街から見通せる状態にはないと思われるが、本作当時、北の桜山地区の北側部分は殆んどが田圃であって、周囲の樹木が伐られていたり、今のように茂っていないか。つたならば、「グーグル・アース」でシミュレートしたが、少なくとも田越川の下流上部の北西に大きく蛇行した部分の川下にちよいと遡れば、石切り場は容易に視認出来たのではないかと私は考えている。なお、ここをさらに遡った、今度は田越川が北に大きく曲がる箇所があるが、この右岸の南西部（現在の田越橋の北詰から北西にある道の右手の路傍に鏡花の二度目の逗子の長期滞在をした住まいはあったのである。或いは、冒頭で「背戸の小橋」と言っているところからは、この冒頭の橋は富士見橋ではなく、田越橋であるとする方が、神武寺や石切り場の方を見上げ得るに確実な場所となるのだが（同前の「逗子フォト」の「田越橋（明治41年）を参照）、ここは富士見橋とは異なり、致命的に相対的に海から上流であり、「海の死者」の登場するに、満潮時で逆流現象が起こるとしても、これ、かなりの問題（齟齬）がある（後述）。そう考えると、実際にはこれらの橋（後でもう一本危なっかしい板橋が出る）は、現在の富士見橋付近を想定して架空に設定された、小さな簡易の橋である（以下の描写を見ても、当時、既に存在した写真で示した昔の富士見橋や田越橋のようではなく、橋幅も異様に狭く、結構が甚だ脆弱なものである）と考えるのが、一番しっくりくるように私には思われ、そうした仮想設定をした結果、自ずと田越川自身が、実際よりももっともっと細い小流れのように描かれていると私は考えている。」

中

虎沙魚、衣沙魚、ダボ沙魚も名にあるが、岡沙魚と言ふのが有らうか、有つても鳴くか
どうか、覺束ない。

けれども爾時、唯何となく然う思つた。

久しい後で、其頃藥研堀に居た友だちと二人で、木場から八幡様へ詣つて、汐入町を土手へ出て、永代へ引返した事がある。其も秋で、土手を通つたのは黄昏時、果しのない一面の蘆原は、唯見る水のない雲で、對方は雲の無い海である。路には處々、葉の落ちた雑樹が、乏しい粗朶の如く疎に散らかつて見えた。

「恚う言ふ時、こんな處へは岡沙魚と言ふのが出て遊ぶ。」
と渠は言つた。

「岡沙魚つて何だらう。」と私が聞いた。

「陸に棲む沙魚なんです。蘆の根から這上つて、其處等へ樹上りをする……性が魚だからね、餘り高くは不可ません。猫柳の枝などに、ちよんと留まつて澄まして居る。人の蹺音がするとね、ひつそりと、飛んで隠れるんです……此の土手の名物だよ。……劫の經た奴は鳴くとさ。」

「何だか化けさうだね。」

「いづれ怪性のものです。一寸氣味の悪いものだよ。」

で、何となく、お伽話を聞くやうで、黄昏のものゝ氣勢が胸に染みた。――成程、そんなものも居さうに思つて、略其の色も、黒の處へ黃味がかつて、ヒヤリとしたものらしく考へた。

後で拵へ言、と分つたが、何故か、有りさうにも思はれる。

其が鳴く……と獨りで可笑しい。

もう、一度、今度は両手に兩側の蘆を取つて、ぶら下るやうにして、橋の片端を拍手に掛けて、トンと遣る、キイと鳴る、トントン、きりりと鳴く。

(きりりりり、

きり、から、きい、から、

きりりりり、きいから、きいから、)

紅の綱で曳く、玉の轆轤が、黄金の井の底に響く音。

「あゝ、橋板が、きしむんだ。削つたら、名器の琴に成らうも知れぬ。」

其處で、欄干を搔擦つた、此の樂器に別れて、散策の畦を行く。

と蘆の中に池……と言ふが、やがて十坪ばかりの窪地がある。汐が上げて來た時ばかり、水を湛へて、眞水には干て了ふ。池の周圍はおどろおどろと蘆の葉が大童で、眞中所、河童の皿にぴちやぴちやと水を溜めて、其處を、干潟に取殘された小魚の泳ぐのが不斷であるから、村の小兒が、袖を結つて水惡戲みに搔廻はす。……やどかりも、うようよ居るが、眞夏などは暫時の汐の絶間にも乾き果てる、壁のやうに固り着いて、稻妻の龜裂が入る。さつと一汐、田越川へ上げて來ると、ぢゆうと水が染みて、其の破れ目にぶつぶつ泡立つて、やがて、満々と水を湛へる。

汐しほが入ると、さて、さすがに濡ぬれずには越こせないから、此處こゝにも一つ、――以前の橋はしと
は間十間あひだ けんとは隔へだたらぬに、又橋またはしを渡わたしてある。これは又、纔またかに板いたを持つて來て、投なげた
に過ぎぬ。池いけのつゞまる、此この板いたを置おいた切れ口きりぐちは、ものの五歩いつあしはない。水みづは川かはから灌そいで、橋はしを抜ぬける、と土手形どてなりの畦あぜに沿そつて、蘆あしの根ねへ染しみこ込むやうに、何處どことなく隠かくれて、田
の畦あぜへと落おちて行く。

今いま、汐時しほどきで、薄うすく一面いちめんに水みづがかゝつて居た。が、水みづよりは蘆あしの葉はの影かげが濃こかった。

今日は、無意味むいみでは此處こゝが渡わたれぬ、後の橋あとが鳴なつたから。待まて、これは唄うたはうも知れな
い。

と踏掛ふみかけて二足ふたあしばかり、板いたの半なかばで、立停たちどまつたが、何なんにも聞きこえぬ。固もとより聞きかうとした
ほどでもなしに、何なんとなく夕暮ゆふぐれの静しづかな水みづの音おとが身みに染しみる。

岩端いはばなや、こゝにも一人ひとり、と、納涼臺すじみだいに掛かけたやうに、其處そこに居あて、さして來くる汐しほを視ながめ
て少時しばらく経くたつた。

「やぶちゃん注：『**虎沙魚**』これは所謂、一般に釣り人が言っている「はぜ」、則ち、条鰭綱スズキ目ハゼ亜目
Gobioidei のハゼ類ではない、スズキ目ワニギス亜目トラギス科トラギス属トラギス *Pargueris pulchella* 或いは同属クラ
カケトラギス *Pargueris sexfasciata* の異名である。沿岸性ではあるものの、まず、このような河口付近の汽水域の浅瀬
にはいない。『**衣沙魚**』この異名は現在生き残っていないようであるが、**私の寺島良安「和漢三才圖會 卷第四十**

八 魚類 河湖有鱗魚』の「彈塗魚」に、『**納彈塗** 深き黒斑有り。頭尾、最も黒く、浮屠の玄衲に擬す【俗に「古

呂毛波世」と云ふ。』とあり、「浮屠の玄衲」とは「墨染の僧衣」の意であるから、当時の私は、これは全体に黒つぽ
く（この黒色は興奮色であるともいう）、頭部の後側に小さな黒斑が点在するハゼ亜科のウロハゼ *Glossogobius olivaceus*
を指すのではないかと私は考えた。『**ダボ沙魚**』これは海産及び汽水域や河川の純粋な淡水域に棲息するハゼ類（その
場合、ゴリ・ドンコ・チチブなどと呼ばれる種が代表される）或いはハゼに似たものを指す。「だぼ」は汎全国的な

「馬鹿・阿呆」の意。ハゼ類の魚が、概ね、面構えが異形であるために愚鈍に見え、しかも貪欲であるため、すぐに
釣れ、それが、間拔けで欲が深い野人を連想させることから、そうした人への蔑称としても「ダボハゼ」はよく使われ
る。『**岡沙魚**』主人公は友人の嘘とするが、私は干潟を飛び跳ねる、なんとも間拔けた顔に見えるハゼ科オキスデルシ

ス亜科 Oxudercinae トビハゼ *Periophthalmus modestus* を真っ先に想起した。無論、彼らには発声器官はなく、声（音）
を立てることはなく、木登りもしはしないけれども。『**薬研堀**』現在の**東京都中央区東日本橋一丁目から二丁目東日本**

橋（グーグル・マップ・データ。以下この注では同じ）にかつて存在した運河で、ここは、その堀周辺の通称地名。

隅田川から直接、引き込まれた荷揚げ用の堀であった。堀は本篇発表の六年前の明治三六（一九〇三）年に完全に埋め立てられて存在しなかった。薬研のように堀の断面がV字形になっていることからの地名である。「木場」ここ。「八幡様」木場の西直近の富岡八幡宮。「汐入町」不詳。後の「永代」は永代橋だから、「今度は両手に両側の蘆を取つて、ぶら下るやうにして、橋の片端を拍手に掛けて、トンと遣る」というこの描写から、この橋は川流れに近いかなり低い位置に渡されていることが判る。これが、私が鏡花による仮想であるとする所以である。「あゝ、橋板が、きしむんだ。削つたら、名器の琴に成らうも知れぬ。」記紀に出る「枯野」伝承をブラックキーにパロディ化したものである。「十坪」畳二十畳弱。「以前の橋とは間十間とは隔たらぬに、又橋を渡してある」これが私が先に言った不審な板を渡しただけの橋とも言えぬ橋、磧の石の上に差し渡した渡渉用の板である。「十間」は僅かに十八メートルである。主人公は決して田越川を有意には遡上してはいないのである。「田の畦へと落ちて行く」この描写が悩ましい。則ち、「今昔マップ」の少し新しい大正期の地図を見ると、田越川の周辺に田圃が確認出来るのは、田越橋を越えた同河川の右岸ところ、例の北へ鉤形に曲がる部分から上流に限られるからである。この辺りも、鏡花は実際の地形とは異なり、河口との距離を極度に圧縮しているように思われのである。「岩端や、こゝにも一人」これは向井去来の名吟「岩はなやこゝにもひとり月の客」「笈日記」（各務支考編・元禄八（一六九五）年刊）では「名月」の前書を有する。一九八九年岩波文庫刊の堀切実編注「蕉門名家句選（下）」によれば、「芭蕉盥」や「鳴矢立」には前書を「小野にまかりて」とあり、これだと、現在の京都市北区小野岩戸にある化岩（読みはネットを調べたが、判らない。「けいわ」か？）での吟ということになる。猿を自らの風狂の姿に転じた面目の句である。「去来抄」の「先師評」に出ることから頓に知られる一句である。」

下

水の面とすれすれに、むらむらと動くものあり。何か影のやうに浮いて行く。……はじめは蘆の葉に縋つた蟹が映つて、流るゝ水に漾ふのであらう、と見たが、あらず、然も心あるものゝ如く、橋に沿うて行きつ戻りつする。さしたての潮が澄んで居るから差覗くとよく分つた――幼兒の拳ほどで、ふはふはと泡を束ねた形。取留のなさは、ちぎれ雲が天空から影を落したか、と視められ、ぬべりとして、ふうはり軽い。全體が薄樺で、黄色い斑がむらむらして、流れのまゝに出たり、消えたり、結んだり、解けたり、どんよりと濁肉の、半ば、水なりに透通るのは、是なん、別のものではない、虎斑の海月である。

生ある一物、不思議はないが、いや、快く戯れる。自在に動く。……が、底ともなく、中ほどともなく、上面ともなく、一條、流れの薄衣を被いで、ふらふら、ふらふら、……斜に伸びて流るゝかと思おもへば、むつくり眞直に頭を立てる、と見ると横に成つて、すいと通る。時に、他に浮かんだものは何にもない。

此の池を獨占、得意の體で、目も耳もない所爲か、熟と視める人の顔の映つた上を、ふい、と勝手に泳いで通る、通る、と引返して又横切る。

其が又思ふばかりではなかった。實際、其處に踞んだ、胸の幅、唯、一尺ばかりの間を、故とらしく泳ぎ廻つて、これ見よがしの、ぬつぺらぼう！

憎い氣がする。

と膝を割つて衝と手を突込む、と水がさらさらと腕に搦んで、一來法師、さしつらりで、ついと退いた。影も溜らず。腕を伸ばしても届かぬ向うで、くるりと廻る風して、澄まして又泳ぐ。

「此奴、」

と思はず呟やいて苦笑した。

「待てよ。」

獲物を、と立つて橋の詰へ寄つて行く、とふはふはと着いて來て、板と蘆の根の行逢つた隅へ、足近く、ついと來たが、蟹の穴か、蘆の根か、ぶくぶく白泡が立つたのを、ひよい、と氣なしに被つたらしい。

ふツ、と言ひさうな其の容體。泡を拂ふが如く、むくりと浮いて出た。

其の内、一本根から斷つて、逆手に取つたが、くなくなした奴、胴中を巻いて水分れをさして遣れ。

で、密と離れた處から突込んで、横寄せに、そろりと寄せて、這奴が夢中で泳ぐ處を、すいと搔上げると、つるりと懸つた。

蓴菜が搦んだやうに見えたが、上へ引く雫とともに、つるつると、這つて、最う何にもなかつた。

「鮎の燐火、退散だ。」

それ見ろ、と何か早や、勝誇つた氣構へして、蘆の穂を頬摺りに、と弓杖をついた處は可

かつたが、同時に目の着く潮のさし口。

川から、さらさらと押して来る、蘆の根の、約二間ばかりの切れ目の眞中。橋と正面に向合ふ處に、くるくると渦を卷いて、坊主め、色も濃く赫と赤らんで見えるまで、躍上る勢で、むくむく浮上つた。

あゝ、人間に恐れをなして、其處から、川筋を乗つて海へ落行くよ、と思ふ、と違ふ。

しばらく同じ處に影を練つて、浮いつ沈みつして居たが、やがて、すすい、横泳ぎで、然し用心深さうな態度で、蘆の根づたひに大廻りに、ひらひらと引返す。

穂は白く、氣の中に暗くなつて、黄昏の色は、うらがれかゝつた草の葉末に敷詰めた。海月に黒い影が添つて、水を捌く輪が大きくなる。

而して動くに連れて、潮は次第に増すやうである。水の面が、水の面が、脈を打つて、ずんずん擴がる。嵩増す潮は、さし口を挟んで、川べりの蘆の根を揺する、……ゆらゆら揺する。一揺り揺れて、ざわざわと動く毎に、池は底から浮上るものに見えて、次に水は増して來た。映る影は人も橋も深く沈んだ。早や、これでは、玄武寺を倒に投げうつても、峰は水底に支へまい。

蘆のまはりに、圓く擴がり、大洋の潮を取つて、穂先に瀧津瀬、水筋の高く成り行く川面から灌ぎ込こむのが、一揉み揉んで、どうと落ちる……一方口のはけ路なれば、橋の下は颯々と瀬に成つて、畦に突當つて渦を卷くと、其處の蘆は、裏を亂して、ぐるぐると舞ふに連れて、穂綿が、はらはらと薄暮あひを蒼く飛んだ。

(さつ、さつ、さつ、

しゆつ、しゆつ、しゆつ、

エイさ、エイさ！)

と矢聲を懸けて、潮を射て駈けるが如く、水の聲が聞なさるゝ。と見ると、龍宮の松火を灯したやうに、彼の身體がどんよりと光を放つた。

白い炎が、影もなく橋にぴたりと寄せた時、水が穂に被るばかりに見えた。

びたびたと板が鳴つて、足がぐらぐらとしたので私は飛退いた。土に下りると、早や其處に水があつた。

橋がだぶりと動いた、と思ふと、海月は、むくむくと泳ぎ上つた。水は次第に溢れて、

光物は衝々と尾を曳く。

此の動物は、風の腥い夜に、空を飛んで人を襲ふと聞いた……暴風雨の沖には、海坊主にも化るであらう。

逢魔ケ時を、慌しく引返して、舊來た橋へ乗る、と、

(きりりりり、)

と鳴つた。此の橋は、やゝ高いから、船に乗つた心地して、先づ意を安んじたが、振返ると、もう此も袂まで潮が来て、海月はひたひたと詰寄せた。が、さすがに、ぶくぶくと其處で留つた、而して、泡が呼吸をするやうな仇光で、

(さつさつさつ、

しゅつしゅつ、

さつ、さつ！)

と曳々聲で、水を押し上げようと努力する氣勢。

玄武寺の頂なる砥の如き巖の面へ、月影が颯とさした。――

「やぶちゃん注…以上で本篇は終わっている。最後なので、邪魔にはならぬから、注は各個を改行して読み易くし、ポイントも本文と同じにしておく。

さて、まずは、ここに登場する「海の使者」たる面妖な「海月」は如何なる種であろうかを考えて見る。大きさは「幼児の拳ほどで、ふはふはと泡を束ねた形。取留のなさは、ちぎれ雲が大空から影を落したか、と視められ、ぬべりとして、ふうはり軽い」とあるところは、いかにも、汽水域でも湾奥の相当な河川や運河の河口から、かなりの奥まで漂ってくるところの、お馴染みの、

鉢虫綱旗口クラゲ目ミズクラゲ科ミズクラゲ属(タイプ種)ミズクラゲ *Aurelia aurita*

を読者は思い浮かべるであろう。それがまた、最も普通に我々が海浜周辺で普通に見るものだし、近年のクラゲ・ブームの中でも、所謂、貴種ではないが、相応に人気のある種ではあるからである。しかし、どうも違う。まず、体色を「全體が薄樺で、黄色い斑がむら

むらして」「虎斑とらまだら」とする。「薄樺」は薄い赤黄色を指し、その傘に黄色い虎のような斑があるというのは、ミズクラゲでは決してあり得ないのである。さらに、動きを見てみよう。「自在じざいに動くうご」のである。「斜はすに伸びて流るながゝかと思おもへば、むつくり眞直まつすぐに頭づを立てる、と見ると横よこに成なつて、すいと通とほる」という部分もそうである。ミズクラゲには自律的な能動的に有意な遊泳能力は殆んどないと言つてよい。このクラゲを主人公が見つけたのは、田越川の河口に近い水深のそれなりにある満潮時に形成される、渦のやや深い砂地のたまさか出来たそう大きくはない潮溜りであるが、そのクラゲはそこで「勝手かつてに泳およいで通とほる、通とほる、と引返ひつかへして又横切またよこぎる」と、極めて運動性能が高いのである。主人公は「故わざとらしく泳およぎ廻まはつて、これ見みよがしの、ぬつぺらぼう！」とまで評している。さらに後のシーンでは、そのクラゲを指して、「鮎たじの燐火ひとだま、退散たいさんだ。」と叫び、「坊主ぼうずめ、色も濃いろこく赫くわツと赤あからんで見えるまで躍をどり上あがる勢いきほひで、むくむく浮上うまあが」り、「やがて、すいすい、横泳よこおよぎで、然し用心深しんぶかさうな態度たいどで、蘆あしの根ねづたひに大廻おほまはりに、ひらひらと引返ひきかへす」とあるのは、強力な自立的遊泳行動が出来る種であることを如実にしている。また、「鮎たじの燐火ひとだま」の直後では、「色も濃いろこく赫くわツと赤あからんで」いるかのように見えると言っていることに着目したい。無論、この下の後半の「海月」の奇体な描写は、既にして現実の世界を外れて、パラル・ワールドとしての鏡花幻想界に足を踏み入れているのだから、その動きや色は、実在するクラゲとして捉えること自体が無効だという方もいよう。事実、確かに鏡花に赤色への偏執的偏移は「春晝」「春晝後刻」でも確信犯として見られるものである。しかし、鏡花の場合、それは口紅や着衣などの実際の緋色の対象物から侵食して行く幻想色であつて、創作上の非連関的彩色では決して、ない。されば、この「色も濃いろこく赫くわツと赤あからんで」というのも、感覚的錯覚ではないと考えるべきである。則ち、このクラゲには「赤」い色が傘にあるのではないか？ ということである。それは、冒頭の「全體ぜんたいが薄樺うすかばで、黄色きいろい斑あちがむらむらして」「虎斑とらまだら」であるという叙述と合致するのである。則ち、虎革のような斑とは、黒ではなく、赤のそれなのではあるまいか。而して――運動能力が高く、傘が薄黄色で、そこに赤い紋がある――というのは、

旗口クラゲ目オキクラゲ科ヤナギクラゲ属アカクラゲ *Chrysaora pacifica*

によく合致するのである。小学館「日本大百科全書」によれば、『傘は柔らかな寒天質に

富み、半球よりやや扁平で、普通、直径』九〇十二『センチメートル、ときにはさらに大形になることがある。傘の外表面上に』は、十六『本の顕著な褐色の太い縞が放射状に並んでいるが、これらの縞は』、時には、『薄くて目だたぬこともあり、また』、『場合によっては』、『ほとんど消失してしまつて』全体に黄白色である』こともある。触手は長く濃褐色で』（但し、先に示した白化個体では触手も同じく白っぽい個体が多い）、『傘縁に』、通常は四十『本みられるが、大形のものでは』五十六『本に達することもある。口腕は』四『個、淡褐色で』、『きわめて長くりボン状である。触手の上の刺胞の毒はきわめて強く、その触手で獲物の小魚などをつかまえて食べる。人間がこれに手を触れると』、『強い痛みを感じ、漁師や海水浴』客』などに嫌われる。このようなこともあつて』、『本種は古くからよく知られ、また各地でいろいろな俗称でよばれている。外傘の模様が旧日本軍の連隊旗の模様に似ていることからレンタイキクラゲ、口腕が長いのでアシナガクラゲ、触手の刺胞が乾燥して微粉となり人間の鼻に入ると粘膜を刺激してくしゃみが出るのでハクシヨシクラゲ、などがそれである。また、瀬戸内海ではアカンコとよばれて釣りの餌に用いられる。このクラゲは北海道から沖縄まで日本の沿岸に広く分布して』いるとある通りで、私は、このクラゲは、百%、アカクラゲがモデルであると断言するものである。但し、主人公のように個体の近くの水中に素手を不用意に差し入れたりすれば、その刺胞に刺されてとんでもないことになるから、ここの描写は頗る危険極まりないことは言っておかねばならない。因みに、アカクラゲを知らぬ方のために、[学名のグーグル画像検索](#)をリンクさせておく。

「^{いちらいはふし}二來法師」 「平家物語」の巻第四の「橋合戦」に登場する園城寺（^{おんじょうじ}三井寺）の老僧乗円坊阿闍梨慶秀が召し使っていた十七歳の雑役僧（半俗僧）。治承四（一一八〇）年の源頼政と以仁王が挙兵すると、剛腕の僧兵筒井淨妙明秀（^{みよつしめう}生没年未詳）がそれに従つて「宇治の戦い」で奮戦したが、ともに従軍していたこの少年が、それを援護せんと修羅場に加わり、討ち死にした。[国立国会図書館デジタルコレクションの昭和二一（一九四六）年岩波書店刊の山田孝雄校訂「平家物語」上巻のここから引く](#)。登場とともに、華麗にアクロバティックに身を飛ばせ、四フリーズで討ち死にするという、「平家物語」の電光石火のフラッシュ・バックが凄い。

*

爰に乘圓坊阿闍梨慶秀が召使ける、一來法師と云ふ、大力の早態在けり。續て後に戦ふが、行柅は狭し、側通るべき様はなし。浄妙房が甲の手さきに手を置いて、「惡う候浄妙房」とて、肩をつんど跳り越えて戦ひける。一來法師打死してんげり。

*

「行柅」は橋板を外して露出した梁の縦方向の材を言う。「甲の手さき」は兜の「吹返し」（鍛の両端が顔の左右の脇で折り返しになっている箇所）の前部を指す。「惡う候」「お先に失礼仕る」の意。鏡花は、ここで一來法師が強豪無双の「手さきに手を」置いて、かく言つて肩をゆらりと飛び越えて行つたさまを、主人公がむんずとせんと手を差し入れた途端、海月が身軽く交わしたことに転じて用いたものである。

「さしつらりで」は、ちよつと不審な語であるが、先の「平家物語」のシーンは、別本では「つんど」は「ゆらりと」とあり、鏡花は、この「タン！」と、軽々と躍り越えるスロ―モーション・シーンをオノマトペイアして「さつ」と「つ」「らりと」と言つたようなものを、縮約して「さしつらりと」と造語したものではないかと私は考えている。さればこそ、「影も溜らず。腕を伸ばしても届かぬ向うで、くるりと廻る風して、澄まして又泳ぐ。」「此奴、」と思はず呟やいて苦笑した」が生きてくるからである。ここでは主人公は宇治「橋」の上の筒井浄妙明秀になり代わつてゐるという洒落を嗅がせた訳である。

「二本根から斷つて、逆手に取つたが、くなくなした奴、胴中を巻いて水分れをさして遣れ」蘆のしつかりした長い一本を根元から剪つて、それで、『海月を掬い上げて、海水から引き揚げてやろうぞ！』と思つたのである。私は相手がアカクラゲであることを知らなかつたか、或いは、知つていて、敢えて無謀を主人公に行わせることを面白いと感じたものかも知れない。昔、若い頃にこれを読んだ時は、何時、主人公はこのアカクラゲに刺されるのだらう、とドキドキして読んだことを忘れない。

「鮎の燐火」時は既に黄昏で、その余光が、海月に光りを与え、暗い色の海面に青白い鬼火のようにそれを見せているのである。「タコの人魂」と言つたのは、海月の傘を蛸坊主に比喩したに過ぎない。

「約二間」三・六四メートル。

「映る影は人も橋も深く沈んだ。早や、これでは、玄武寺を倒に投げうつても、峰は水底に支へまい」ここで、たまさか、幻想世界が現実を完全に侵食してしまい、奈落の地獄へと呑み込んでしまう。鏡花幻界の絶妙な魔術である。

「さつ、さつ、さつ」「しゅつ、しゅつ、しゅつ」「エイさ、エイさ！」は、最後の「さつさつさつ」「しゅつしゅつ」「さつ、さつ！」とともに、人間界へと迫り、致命的に押し沈めんとする地上に終末期を予感させる満潮——日本沈没の沈鐘の響き——のオノマトペイアである。

「此の動物は、風の腥い夜に、空を飛んで人を襲ふと聞いた……暴風雨の沖には、海坊主にも化するであらう」クラゲを妖怪化した説話や怪奇談を私はちよつと思ひ出せない。しかし、極めて腑に落ちる。日本の文学に最初に出現する生物はクラゲであるから……頗る腑に落ちる。……「古事記」冒頭……「次國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、」（次に國稚く浮き脂のごとくして、くらげなすただよへる時、）……

「玄武寺の頂なる砥の如き巖の面へ、月影が颯とさした。——」直前の聴覚の「橋鳴り」の「きりりりり、」の効果とともに、絶妙視覚的コード！」